

【書評】

『ジェンダーから見た日本語教科書—日本女性像の昨日・今日・明日—』
(水本光美、大学教育出版、2015年)

小川早百合

『ジェンダーから見た日本語教科書』という端的なタイトルの著作であるが、内容は、ジェンダーをテーマとして、日本語の女ことばの使用についての考察を軸としたものだが、それ以上に、外国語教育の在り方、日本の女性像、日本社会の現状にまで切り込み、データ分析を駆使しそれを論拠として、客観性を高く保持しながら論を展開する著作である。多様な視点と考察が満載の同書は「読み得」な1冊と言ってよいものであろう。

内容の骨子は、以下のような4部構成、全8章と序・終章から成っている。

序章 日本語教科書は日本文化への入口

第1部 女ことばは若者から消えてしまったのか：女性文末詞の行方

第1章 女性文末詞の使用実態状況

第2章 4世代の主張度の高い女性文末詞使用実態状況

第2部 日本語教材は現代日本女性のことばづかいを反映しているか

第3章 日本語教材における女性文末詞の使用実態調査

第4章 日本語教材が学習者に与える影響

第3部 日本語教科書に描かれる女性像は現状を反映しているか

第5章 日本語教科書が伝える日本女性像

第6章 現在の実社会における女性の姿

第7章 日本の家族像

第4部 日本語教師は教科書が伝えるものをどう考えているか

第8章 日本語教師に対する意識調査

終章 これからの日本語教科書

ここで見てわかるように、女ことばの現状、日本語教科書での女ことばの扱われ方から、教科書の在り方へと論が展開されている。これらの中から、いくつか特徴的なことを挙げてみたい。

まず第1に、同書の主要な趣旨からははずれるが、類書には見られない「面白い」視点としては、女ことばを「消滅することば」として位置付けて扱っていることである。消滅することばを外国人学習者が学ぶ必要はなさそうなものである。しかし、消滅するから学ばなくてもよい、とは言いついてはいない。「消滅した」のではなく「消滅する」「消滅しつつある」ことばをどう取り扱って教えていくかという問題提起をしているのではないだろうか。それは筆者の意図するところとは異なるかもしれないが、興味深い問題提起であることは確かである。同書の中では、女ことばを明示的に「消滅することば」とする視点で正面から取り扱っていないが、「女ことばの消滅をことさら研究するのか」という疑問を持つ人に対して、いくつかの視点からの回答が述べられている。

第2に、データの利用に関する点をいくつか見ておきたい。同書は「文末に現れる文末詞としての女ことば」の使用のデータ分析が論述の1つの柱となっている。

まずデータの収集範囲の点でみると、日本語教科書・副教材から日本留学試験、日本語能力試験の問題文にまで広がっているのみならず、著者の研究の出発点が、テレビドラマ分析だという点を考えると、女性文末詞（または女ことば）研究のテーマと材料は、日常の中に宝として眠っていることを改めて強く感じさせられる。

加えて、本書にはデータの数値の記述が多いからといって、数字の羅列という印象は全くなく、事実を数値によってコンパクトにまとめて、読みやすくしているという印象を与えている。その理由は、上記のデータ収集範囲の広さとも関係していて、女性文末詞がそれぞれの場面で、どう使われているかがそれぞれ詳細に分析されているからである。テレビドラマの分析は、著者の研究業績の1つとして著名なものであり、女性文末詞の使用状況から、ドラマに登場する女性のキャラクターの設定を解き明かして3つに類型化し（「多使用タイプ」「無使用タイプ」「時々スイッチ型」、同書 p.29）、論じているのは、特に興味を惹かれる点である。とくに「多使用タイプ」（使用率 50%以上）が、キャリア系・専業主婦系のキャラクターだという点である。ドラマにおけるこの使用率 50%は、現実社会の会話における使用率の 10 倍以上ということだが、ここに専業主婦が入るのはイメージとして理解できるとしても、キャリア系が女性文末詞を多く使用するキャラクターとして描かれるというのには新たな発見がある。ただし、テレビドラマの分析は、現実社会をどの程度反映するものなのか、という問題は常に意識しておく必要がある。ドラマの脚本分析は、何を分析しているものであろうか。現実社会の人々の会話を分析しているものではない。脚本家の女性文末詞に対する「意識」を分析しているに他ならないのである。その点について著者は、水本ほか（2008）では詳述しているものの、同書では十分に説明されていないようで、そこは同研究の基礎的な課題であると思えるだけに、最初に言及がほしかった点である。

次に、その扱うデータ量についてであるが、その豊富さは、他の追従を許さないのではないだろうか。著者自身の実施した調査データには、女性文末詞使用率に関して、自然会話 66 名分、ロールプレイ 58 名分、テレビドラマの脚本、日本語教科書 60 冊および関連教材などにみられるものまで扱い、さらに国内外の日本語教育関係者 200 名分の会話および会話参加者へのアンケート調査をも含め、豊富なデータ量を誇っている。それに加えて、他の研究者による調査データも考察の際によく吟味されている。自ら調査をする、これは研究態度の基本であるが、幅広くすべてのことがカバーし切れない時には、先行研究に十分に言及し、その成果を活用することによって、自身の調査の客観性をより高めるのも必須のことであろう。1つの研究は、その人（グループ）の研究であるが、それを公開する理由は、自分の研究の偉大さを示すためでなく、研究者を含むあらゆる人に資するためであるということを改めて気づかせてくれる。

そして、同書のデータ分析の中で、最も注目したいところは、ロールプレイ会話のデータである。ロールプレイ会話調査を実施した年代別の女ことばの使用状況、またその年代による変遷を分析するという研究方法は、これまでになされたことのない筆者独自のものであろう。また、女性文末詞使用率の算出基準を明確にするために、女性文末詞の〈使用〉と〈不使用〉の出現数を2項対立表にして一覧できるようにしたのも著者独自の手法である。

さて、ロールプレイを実施することで、日本の女性の中の意識にある「女ことば」「女としてのふるまい方」「女として求められているもの」を描き出すことができているはずである。そうした意識、むしろ「無意識」の中でなされるロールプレイと自然発話とのギャップについて、実はどう考えるべきなのであろうか。著者は、ロールプレイによるデータ収集をした理由を「自然会話はごく親しい間柄の2人の気楽なおしゃべりであり、……自己主張といった主張度の高い場面に

おける若い女性たちのカジュアル会話を一定量以上収集するのは実際には困難」としている。一方「日頃の話者の話し方や使用する文末詞がロールプレイによって影響を与えられることはなく、極めて自然な会話の収集が可能であることが確認できた」(同書 p.35)としている。この点に、少々の矛盾はないだろうか。すなわち、若い女性たちは、通常は、主張度の高い会話をあまりしない、ということが示されている。そうした使用実態についてはさておき、女性文末詞が「使用される」際には、どのように使われるかという点を主に注視している。だからと言って、このロールプレイ調査の価値が下がるものではないが、ここから考えられることは、日本語教科書で教える「自然会話」とは何なのか、「自然会話」を教える必要があるのかという疑問である。あるいは、ロールプレイという無意識の中に生じている「人工会話」のようなものを日本語教育で行っているのではないだろうか。実際の日常生活では、あまり主張度の高い会話はしない、としたらどんな会話を教えたらいいのだろうか。「自然会話」を学ぶことを肯定的に捉える主張が、筆者の論述の根底にあるのだろうかとは感じ取れるが、このロールプレイの調査から、何を以て「自然会話」とするか、について考えさせられる示唆に富む調査研究であるといえる。

第3に、教科書の在り方についての論の展開についてみてきたい。

教科書の在り方について、著者は序章で「日本語教科書は日本文化への入口」としている。「言語を学ぶ」その根底には「文化を学ぶ」ことがあるという当然のことを言っているのであるが、それをジェンダーの視点から述べている点が、当然ながら同書の特徴となっている。教科書の在り方は、現在社会の実情を示すものであるべきなのか。教科書の在り方については同書冒頭の「はじめに」で、「共に考えようとするを目的としている」として、決定的な結論は提示していない。また加えて言えば、日本語の教科書は現在社会の実情を表していないという点を指摘・批判しているが、どうして教科書が現在社会の事情を反映しなくてはいけないのかの理由については、明示されていないのではないだろうか。それは著者が同書の主たる目的としては意図しないことなのかもしれないが、ここで、今の社会、即ち学習者が実生活をしている社会環境で適切に使える言葉を教えるのが外国語としての日本語教育の1つの重要な点であるということは、論じておいてほしかった点である。

しかし、教科書に出てくる女性像を扱いながら、現代社会の様相に切り込んでいる点は鋭い。特に、教科書に登場する日本女性像をイラストによって、まとめて示す手法が、教科書の問題を通じて、現代社会の問題を端的にかつ明確に描き出している。女性の領分とされている、夫や子供を家から送り出し・出迎える役割、留守番、狭い世界しか語れないコミュニケーション力、主婦・「おばさん」的な図々しさなどのステレオタイプである。これまで、私たちがなんとなくステレオタイプ的に扱われていると感じ、問題があるのではないかと感じていた女性像を、教科書分析の結果としてイラストで示すことによって、どんな論述よりも、みごとに表現し、一見で印象づけることに成功している。それに加えて、データによる論拠付けもグラフも併用して示されており、漠然としたイメージイラストではなく、論拠のあるものをこのようにして、説得的に提示した記述方法があることを教えてくれるものである。

第4に、最後になるが、2点ほど気づいたことを記しておきたい。

同書を読んで、女性像しか扱っていないという不満をもつ人がいるかもしれない。もしそうであれば、ぜひ、男性像を扱った研究に着手してみるのはどうであろうか。そして、同書に比するくらいの男ことば研究の視点から、外国語教育の在り方、日本の男性像へと展開する研究が、出てきてほしいものである。それは、もしかすると、同書の著者の水本氏が、今後成し遂げてしま

うことかもしれない。水本氏は、女性ことば、女性像を研究対象としたのは個人の興味からの発想であると書いているが、同氏の女ことばの研究が熟成すれば、やがては、男ことばへの研究に向かうだろうことを期待している。

そして、もう1点として、同書の最後、終章の中に教科書への一提案を入れているのは、論術構成上、よく考えられたものである。しかし、「一提案」とする節がありながら、具体的な提案が十分にされていないような印象を受ける。提案を強くしてしまうと、論述としての客観性が失われる可能性もあり、そうしたバランスに配慮したためかもしれないが、この筆者ならば、何か画期的な提案がされているのかもしれないと、ここまでわくわくして読んできただけに、多少の期待外れを感じないでもない。特に終章の最後に、「教科書執筆者がこの時の流れを諦観し、今後の教科書制作や改編時に実情を反映させる努力を惜しまないことに大いに期待したい」として締めくくっているが、今後は他人に任せてしまうのだろうか。あるいは、著者が中心となり、日本語ジェンダー学会が、その仕事を継承していくことが期待できるのであろうか。筆者の議論と主張に沿った教科書が世に出されることを、望むものである。

教科書分析を通じて、日本社会の描かれ方を解明し、それが、より現在社会に近い描かれ方をすることを提言しているが、著者は、日本語教科書改革を唱えながら、実はそれを通じて、現実の日本社会での日本女性の生き方、ジェンダー問題の更なる変革の期待と志を示そうとしていることを感じさせる1冊である。

(おがわ さゆり・日本女子大学教授)